法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

「経済学批判体系」の一考察(1)

HIRABAYASHI, Chimaki / 平林, 千牧

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
40
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
91
(終了ページ / End Page)
124
(発行年 / Year)
1972-10-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008335

「経済学批判体系」の一考察（一）

平林千牧

一　はじめに

本稿は、マルクスがA・スミス、D・リカードによって代表される古典派経済学者の成果について彼の資本主義社会の分析のための重要な先行者の学問的所産であることを認め、それによって彼自身が本格的な経済学の研究に取り組むことになった時期以降の彼の経済学の体系化における基礎的な性格に関する問題を考察したものである。

もとより、経済学を中心として見た場合にも、『資本論』に先きだつ彼の経済学研究の発展過程については、従来からいろいろなかたちで取り上げられ考察されてきている。そして、それらの研究で果たされてきたものについては多くの注目すべき成果を認めなければならない。とくに、周知の『経済学批判要綱』(1)を対象とする研究が可能になったことによるそうした研究の発展はきわめて著しいと言うことができる。だが、研究のための素材に恵まれるということと、科学的な研究成果を生みだすということは、かならずしも一致することではないだろう。素材を通してその全体を統一的に把握する困難がむしろ生ずる場合もありうるであろう。マルクスの経済学研究の発展過

程をたどる場合にもこうした事情が存在しうるのであって、ごく一般的に見ても、彼が哲学の研究や唯物史観の形成、そして「経済学批判」としての経済学の体系化というきわめて多岐にわたる学問領域にかかわったということから、そうしたことが当然なことだと言いうるのである。もちろん、彼の経済学研究の領域だけについて言えば、『資本論』のもつ意義を中心としてその成立過程が取り上げられ考察されてきたのであるから、そうした意味では、素材の取り扱いに対しては事実上ある程度の基準が与えられていたとみることができる。したがって、それは、たとえば『経済学批判』の「序言」における「ブルジョア社会の解剖学は経済学のうちに求めなければならない」とするマルクスの認識を基礎とし、その成果として資本・賃労働関係に基づく資本主義社会の一般的構造を明らかにした『資本論』への理論的発展のうちにマルクスの経済学研究における独自性を解明するということになっているのである。だが、このような考察についても、かならずしも十分な納得が得られてきたのではないのであって、その独自性については、マルクスに先きだつ経済学に対する関連において、とくにマルクスにそれを可能としたゆえんが問われ、それによってまた彼の経済学に対する理解も左右されてくることになるからである。

ところで、マルクスに関するこのような問題は、実は、経済学の理論体系に関連するものとしては、かならずしもマルクスにだけ特有なこととは言えない。経済学の理論史の流れにおいて、とりわけその理論のうちに原理的領域をかなりの程度に明確化しうることになっているイギリスの古典派経済学以降において、たとえば、A・スミス、D・リカードらについても、彼らが先行者よりはるかに進んだ経済学の原理論的体系を形成しえたその特有な観点が存在していたのであって、そのかぎりでは、ただマルクスだけについて言うことは、その問題に対する理解を十分なものにするものではないであろうし、しかも、スミス、リカード、マルクスにおけるその関係はそれぞれ異なっているのであるから、同一視することはできない、と考えるべきである、というように、である。事実、最

近の経済学史の研究に関連して、このような指摘がなされている。

「経済学者スミスと経済学者リカードを直結して経済学書の『資本論』とつなぐというやり方ではスミスとリカードとマルクスの経済学を経済学の流れだけで考える結果、市民社会の経済学的分析という、かれらが問題にした、そしてわれわれがいま問題にせねばならぬ、肝心な視点が経済学研究の視野からずりおちる傾向をもつからである。」

その「肝心な視点」とはつまりこうである。

「スミスが、またマルクスが、経済学から経済学研究を始めたのではないということの認識は、スミスの世界とリカードの世界をあまりに安直に結びつけるべきではないという認識とともに、今日われわれが、現代社会そのものを……経済学的におさえてゆくために生かされなくてはならない。」（『経済学史』、「経済学全集3」、筑摩書房、一九七〇年、五および七ページ。）

「肝心な視点」は、スミス、マルクスが「経済学から経済学研究を始めたのではない」という「認識」にほかならないのであり、これは、結局のところ、先の観点と経済学の理論体系との関連の問題に帰着することである。このような主張は、今日では種々のかたちで見うけられるわけであるが――そしてまた、以前からもある意味では思想と科学というようなかたちによって提出されてきたわけであるが――、それの帰するところは、「視点」によって理論のもつ性格を規定しようということである。だが、このような理解は、いってみれば、また「肝心な視点」が脱落してしまっているわけである。その原因は端的には、「市民社会の経済学的分析」ということばにある。というのは、スミス、マルクスが当初から経済学研究を進めたのではないにしても、彼らが現実の、あるいは現実を経過しつつ進みそして社会的に支配的になりつつある一定の傾向の考察なり分析なりを、なぜ経済学として行なわ

ざるをえなかったのか、ということは無視されてしまうからである。しかもそれは、価値論（労働価値論）を軸にした法則的必然性の把握という理論的解明として行なわれているのであって、それを無視して、右のような考察を与えることは、経済学そのものの根拠をも不明にしてしまいかねないのである。

視点が異なっていたために、成立した理論体系に相違が生じていることは事実である。しかし、その場合、その視点によって対象（資本家的商品経済）から取り出そうとしたものに相違があったわけではない。それだからこそ、それぞれのものが、対象の把握を経済学として、とりわけ原理的なものが軸になっていくかたちで行なったわけである。そしてここに、自明のことであるが、資本家的商品経済の有する特有な性格（自立的な自己統一的運動を形成しているという——価値法則的運動の——性格）を理論的に解明する経済学の原理的領域に対する考察の発展がみられたわけであって、その視点の相違は、この場合の原理的抽象との関連で問題になることにならざるをえなくなるのである。おそらく、視点というメスによって、対象の解剖に相違は生ずるであろう。しかし、その際でも、その相違は、あくまでも、対象の有する性格を、どの程度にまで抽象し、理論的に体系的なものとして処理しえているかということにおいて問題になるものである。だから、結局、考察しなければならないのは、基本的にはあくまでも理論——経済学の理論体系——の側にあるのである。

こうしてみると、実はすでに、経済学の理論史のなかにある問題が、また同時にマルクスの『資本論』に先きだつ経済学研究にとくにかかわってくる。というよりはむしろ、「経済学批判」として、主にイギリスの古典派経済学に対する批判的考察を通じて経済学の理論的体系化を進めたマルクスの研究過程は、まさに「ブルジョア社会の解剖学」を経済学において進めた彼の先行者との関連を基礎とする以外に、その意義を確定することはできないものと考えられるのである。もちろん、マルクス自身についても、スミスと同様に、考察されなければならない「肝

心な視点」があるわけであって、それを無視することはできない。それを通じて彼は古典派経済学の限界を克服する経済学の原理体系の確立をなしているのである。だが、この場合でも結局は、スミスやリカードにおいて、それぞれの視点から解明した対象の経済学的分析が彼らの経済学理論の原理的領域として受け止められ、先述した対象のもつ特有な性格をどの程度そういうものとして客観的に解明しえているかどうかということが、彼らの理論の領域の検討によって明らかにしえるのであるから、基本的には彼らの理論を彼らの原理的性格において把握し、解明する、ということのもつ意義とマルクスにおける「肝心な視点」とは区別するものはないと言いうるであろう。だから、『資本論』に先きだつマルクスの経済学研究――とくに「経済学批判」の視角の成立がみられた以降の研究――は、中心的にはスミス、リカードらにおける経済学の性格をそのうちにある原理的領域、なかんずく原理を原理として成立せしめている彼らの価値法則の把握、において確定するという経済学の理論史としての研究基準をもってそれに即するかたちで、一定の考察が加えられるべきであろう。(2)

したがって、本稿では、マルクスが彼の特有な視点を通じて資本家的商品経済の解明に向った点を、彼に先きだってすでに一定の解明を進め、かなりの程度に原理的領域の考察を示しうることになっていたイギリスの古典派経済学の、とくにスミス、リカードの成果に対する限界の確定との関連で考察し、そうすることによって、彼の経済学の原理的体系化における問題の所在を明らかにするものである。そしてその際、すでに言及したことから明らかなように、マルクスの労働価値論および価値法則論を中心として考察するものである。

(1)　以下本文中に引用の『経済学批判要綱』(*Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie* (Rohentwurf) 1857―1858, Anhang 1850―1859, Dietz Verlag Berlin 1953) については、『グルンドリッセ』と略記し、引用ページ数の表示についても、*Grundrisse* として原本ページのみを記した。

なお、マルクスに関する文献は原則として、Marx-Engels Werke により引用し、同様に原本ページのみを記した。

(2) この点に関する問題は、すでに、経済学史の研究方法として、「中心的には理論史として——原理論の生成発展史として——考察するべきである」という時永淑教授によって明らかにされている。本稿の方法的考察も教授の示唆に負っている。なお教授の主張は『経済学史』(法政大学出版局、一九七一年、改訂増補版)「序論」、とくにその「三、理論史としての研究基準」(同書、二六ページ以降)において示されている。またマルクスに対する問題については、同書、三四五—四六ページ、とりわけ、「経済学批判」の視角による彼の経済学の体系化に関する点については、同書、三八七—三九〇ページにおいて示されている。

二 「経済学批判」成立期の資本・賃労働関係の解明

1 古典派経済学の限界設定について

マルクスが「経済学批判」というかたちで進めた経済学の体系化は、A・スミス、D・リカードを軸とする古典派経済学に対する彼の批判的視角と不可分の関係にあったわけであるが、そのような関係が明確に彼の原理的体系化の模索として、または独自の積極的な理論的展開として進められたところに『グルンドリッセ』の重要性があることは言うまでもない。そして、こうした意味においては、その批判的視角は彼による古典派経済学の限界設定と結びついていたのであり、マルクスの経済学の成立を見る場合においては、彼が提起しているこの限界設定を通じてその視角の具体的特徴をとらえることが可能である。そこでまずこの点について取り上げておこう。

のちに考察するように、マルクスは一八四〇年代後半の『哲学の貧困』、『賃労働と資本』等を中心に、リカード経済学の理論的性格あるいはその学説史的地位の評価をかなり明確に把握し、同時にそれの批判的考察に向うよう

になっていた。『グルンドリッセ』では、マルクスはまずそのような過程をへてきたうえで次のように言っている。

「価値の発生を理解することの困難さは、1、リカードのことを、彼が剰余(Surplus)を理解しなかった、剰余価値(Mehrwert)を理解しなかったと言って非難している近代のイギリスの経済学者たち……において現われている。それにしても剰余を理解したのがすべての経済学者のうちでリカードだけだったことは、A・スミスの賃銀(salär)による価値規定と商品に対象化された労働時間による価値規定との混同に対する彼の反論が証明しているとおりである。……もちろん、リカード自身もしばしば混乱に陥っている。……根本的欠陥は、彼が賃銀による価値規定と対象化された労働による価値規定との相違がいったいどこから生ずるのかを、どこにも研究していないことである。だから、彼の経済学では、貨幣も交換そのもの(流通)も純粋に形式的な要素としてしか現われない。……媒介の形態については、彼はどこにも研究しなかったのである。」(*Grundrisse*., S. 232—233.)

このように、マルクスは、いちおうはリカードをスミスにおける「賃銀による価値規定」と「対象化された労働時間による価値規定」との混同に基づく欠陥をとらえたものとして評価しながら、そのうえでなお、リカードにおいてはその混同の生ずる根拠について、「媒介の形態」の解明の欠如のために、明らかにされていない点のあることを批判しているのである。このようなマルクスの理解は、ひとまずスミスの価値規定をも批判的視角のうちにとらえスミスの価値規定における混乱を解決することによって、剰余価値と資本家的商品経済に特有な「媒介の形態」たる「流通」の諸規定とを取りだすことが可能になるのだ、としているものと考えられる。だが、この『グルンドリッセ』においては、マルクスは剰余価値の唯一の理解者たるリカードに力点を置いており、言い換えれば剰余価値分析の側面に経済学的発展の力点を置くかたちになっており、かならずしもスミスの価値規定の混乱自体を自己の批判的視角のなかに積極的に入れてはいないと思われる。この点については、『グルンドリッセ』の時期までの

マルクスのスミス、リカードに対する評価に関係するものと言いうるが、このようなことに関するものとしては、たとえば彼は次のようにも述べているのである。

「A・スミスによると、労働は本来自分自身の生産物を賃銀として受け取り、賃銀イコール生産物であって、したがって労働は賃労働ではなく、資本は資本ではないはずであった。」(*a. a. O.*, S. 236.)

つまり、マルクスはスミスにおける賃銀による価値規定を、彼の資本・賃労働関係の把握に関しては積極的に自己の理論的視野に入りうるものとして解しておらず、かえって消極的に見ていたと考えられるのである。したがって、このようなことに対応して、彼の古典派経済学に対する関係としては、リカード経済学の評価が積極的になっていたわけである。この点は、たとえば、一八五〇—五一年のあいだに彼がリカードを対象とした研究に従事し、その「ノート」を残していること、また『グルンドリッセ』において、「リカード学派の混乱を指摘するために重要」なこととして、「純粋な労働時間による価値の規定は、ただ資本による生産の基礎のうえだけで、また両階級の分裂の基礎のうえだけで生ずる」(*a. a. O.*, S. 701) と指摘していることからも考えうることと思われるのである。

それゆえ、マルクスは、投下労働量による商品の価値規定に基づいてそれなりに経済学の原理的体系を展開することになったリカードの労働価値論を、資本・賃労働関係に基礎を置く資本家的生産のうえで再構成することに、つまり剰余価値の把握とリカードの見落した「媒介の形態（流通）」を展開することに、事実上は古典派経済学の限界を設定したのである。こうした事情は、のちに見るようなマルクスの原理体系の深化過程を別にしてその結果からみれば、一八六〇年代の最初の時期の草稿からなる『剰余価値に関する諸学説』(以下、邦訳名に従って『剰余価値学説史』と呼び、引用等は *Theorien* とのみ表記する) ではいっそう明確にされているのである。たとえば、マルクスはそこにおいて次のようなリカード理論の難点を指摘し、彼の古典派経済学の限界設定に対する関係を示すこと

になっている。

「リカード体系における第一の困難は資本と労働との交換――それが『価値の法則』に一致しているように行なわれること――であった。

第二の困難は、等量の諸資本がその有機的構成がどうであろうと、相等しい利潤をもたらす――または一般的利潤率をもたらす――ということであった。」（*Theorien*, Werke, Bd. 26-Ⅲ, S. 231.）

または、「リカード学派への結論的覚え書き」の部分で、さらに端的にこのように言っている。

「リカード学派の叙述全体が示していることは、この学派が次の二つの点に帰着するということである。

一、価値の法則に一致する資本と労働とのあいだの交換。

二、一般的利潤率の形成。剰余価値と利潤との同一視。価値と費用価格との関係の無理解。」[1]（*a. a. O.*, S. 233.）

こうして、リカード理論に対する関係を軸としつつ、マルクスは資本・賃労働関係に基づく資本家的商品経済の独自の体系的把握に向ったのであるが、以上のような古典派経済学の限界設定を前提とする、あるいは表裏の関係にある彼の「経済学批判」としての視角の特徴を知るために、なお『グルンドリッセ』に先きだつ彼の経済学的考察を対象とした成立過程における検討を加えておくべきだろう。

（1）マルクスによる古典派経済学の限界設定に対応する彼の原理的体系の成立過程の特質を知るうえでは、別のかたちとして周知の「経済学批判体系のプラン」に関する問題がある。プラン問題一般についてはともかく、右の関連についてのマルクスのプランの意義、あるいは、彼の原理体系成立過程に対するプランの位置については、前出の時永淑『経済学史』、改訂増補版、第二章以降を参照されたい。

2　『グルンドリッセ』以前に関する若干の検討

リカード経済学を軸とするマルクスの古典派経済学の限界の確定作業は、一八四〇年代の後半における『哲学の貧困』および『賃労働と資本』においてほぼその萌芽を見ることができるように思われる。周知のように、プチブル・ソーシャリスト、プルードンに対する批判の書たる『哲学の貧困』（一八四七年）では、「リカードの価値論は現在の経済生活の科学的解説」であるとしながら、プルードンの経済学理解は、「リカード理論のユートピア的解釈」(Werke, Bd. 4, S. 86) であると規定している。マルクスがこのような規定を与えていることには、明らかに、先述した『グルンドリッセ』の視角に引き継がれた彼の古典派に対する限界設定に関連する理解がすでに問題になりはじめていたと考えられるのである。というのは、彼はまたすでにふれたスミスの価値規定の混乱にふれ、次のような指摘をも行なっているのである。

「リカードは、これら二つの測定方法の同じでないことを明確にすることによって、その誤りを明らかにした。プルードン君は、アダム・スミスがただ並べておいただけのこの二つのものを同一視することにより、アダム・スミスの誤りにさらに輪をかけることになっている。」(a. a. O., S. 87.)

したがって、この「同一視」は「すべての人々を等しい労働量を交換する直接の労働者にすることによって社会を改良」しようとする、労働時間による商品の価値の決定というリカード理論の「公式の『平等主義的な』適用」(a. a. O., S. 78) なのであって、こうした理解は結局「自由な買い手を自由な生産者に対立させる」(a. a. O., S. 75) ことに帰着し、「スミスの誤り」を再び繰り返えすことになるにすぎないとされるのである。

もちろん、『哲学の貧困』の全体を貫くマルクスの理論展開は従来からのいわゆる唯物史観から与えられている。したがって、ブルジョア社会を経済学のうちに解明したスミス、リカードらの理論体系は、結局のところ、その社会が根本的に基礎を置いているブルジョアジーとプロレタリアートとの階級対立を見ないことによって、またその対立関係の展開に基づけば「空理空論的なもの」とならざるをえないとされるのである。このような理解からすれば、古典派経済学、とくにここである程度積極的な評価を与えたリカード理論といえども、「多かれ少なかれ偽りの衣をまとって」いることになるのであって、真に科学的な理論とみなすわけにいかないことになるのである。

こうして、マルクスは『哲学の貧困』ではいまだ唯物史観に基づくブルジョア社会の把握を根本としながらも、プルードン批判を通じて、古典派経済学とりわけリカード経済学を「科学的解説」として認めないわけにはいかなかったのである。そしてこの場合、たとえそれが「偽りの衣」をまとっていようともプルードンが陥った「自由な買い手」と「自由な生産者」との関係にみられるこの「偽りの衣」と資本・賃労働の階級関係とが、彼のリカード理論の評価をなす労働価値論とどのような関連をもつものであるかということに対する解答を、マルクスは自分自身に問われていたとみることができるのである。事実、彼は『哲学の貧困』から二年後の『賃労働と資本』においてこの点についてそれなりに答えようとしたのである。(1)

すでに、『賃労働と資本』（一八四九年）については、古典派経済学と区別されるマルクスの経済学上の独自的な発展として、労働と労働力の区別、総じて剰余価値論の成立が指摘されてきており、したがってここに彼の経済学研究の画期があると考えられていることも周知である。『賃労働と資本』においては、かならずしも、右のような点を全面的に認めうるとは思われない。だが、これらのことと関連しつつ、のちの『グルンドリッセ』において示されることになったさきの彼の古典派経済学に対する批判的視角に結びついて行った彼の独自な――そして『哲学

の貧困』で彼自身が問われた――対象把握のための考察方法がかなり明瞭に形成されはじめていたと言いうる。まずさしあたりそこで彼が展開した議論の骨子をみることによって、その点を明らかにしておこう。

マルクスは、そこでは、資本・賃労働関係が商品経済的な自己統一的な機構のもとにあることを認めて理論を展開しようとする。したがって、彼にとっては、さきにリカード理論を受容したと同じところから、すなわち「価格は商品の生産に必要な労働時間によって決定される」という労働価値論を基礎とするところから資本・賃労働関係を解明するということが問題となる。そこで、この労働価値論と資本・賃労働との関係において労働者の受け取る賃銀が基準とするものはなにかが明らかにされなければならない。この点を彼はこのように考えている。すなわち「商品一般の価格を規制する同じ一般法則は、もちろん、労賃すなわち労働の価格をも規制する」と。では、「労賃」すなわち「労働の価格」はどのようにして「一般法則」に規制されることになるのだろうか。彼はその「規制」の意味について「労働の生産費」という考えを示し、それは「労働者を労働者として維持するために、また労働者を労働者として育てあげるために必要とされる費用」なのだとしてとらえる。そして、この場合の「費用」の内容は次のようなことになっている。

「簡単な労働の生産費を総計すれば、労働者の生存と繁殖費となる。この生存と繁殖費の価格は労賃を形成する。こうして決定される労賃は労賃の最低限と呼ばれる。この労賃の最低限は、生産費一般による商品の価格決定と同じように、個々の個人にではなく、〔労働者という〕種族にあてはまる。個々の労働者は、幾百万の労働者は、生存し繁殖しうるだけを受け取ってはいない。だが、全労働者階級の労賃はその変動の内部においてこの最低限に一致する。」（以上、Werke, Bd. 6, S. 405―407. 傍点は引用者。）

このように、マルクスの指摘する「一般法則」に規制される「労働の生産費」または「費用」とは、結局、「労

働者の生存と繁殖費の最低限」というかたちでの、労働者の生存にとって不可欠である生活資料の量を前提とし、その生産費＝価格をもって賃銀＝「労働の価格」としているものと言いうる。このような考えは、彼の資本の解明とともにいっそうはっきり表わされている。

彼は資本をまず、「物質的諸生産物の一総量であるばかりではなく、諸商品の、社会的な大きさの一総量」でもあるととらえ、さらに、それが資本として機能する、またはその「総量」が資本になるということを、「それが、自立する社会的権能として、すなわち社会の一部分のものの権能として、直接の生きている労働との交換により、みずからを維持し、増殖することによってである」とする。こうして、「諸商品の、社会的大きさの一総量」としての資本は、「労働者の生存と繁殖費」に相当する賃銀という交換価値の大きさで労働者に相対し、そうして「自分の生活資料と交換して労働を、労働者の生産的活動を、創造力を、受け取る」(以上、*a, a, O*, S. 409) ことになるのである。

ここでは、明らかにマルクスは、一方で資本を、社会的な物質代謝過程における「物質的諸生産物」の全体を商品形態において支配するという意味でのその総量としてとらえ、他方で賃労働を、その総量の一部分を「生存と繁殖費の最低限」のかたちで受け取りながら、それ以上の「生産的活動」をなすものと規定し、そうすることによって両者が生産を基礎にした対立関係にあるものと説いている。(3)

こうしてみると、ここではかなり明瞭にマルクスが、資本と賃労働との資本家的生産のもとでの特有な経済的関係を彼の独自な方法で解明するかたちを、つまり資本家的商品経済それ自身にそくしてとらえようとしていることをみることができるのである。すなわち、資本・賃労働関係を労働力商品の売買関係、つまり資本と労働との「交換関係」という側面と、資本のもとで労働者がみずからの「生産的活動」、「創造力」を実証する、つまり資本の増

殖の根拠をそこで生みだす「生産」の側面との、この二側面に分離して解明するというかたちである。そして、このかたちは、先の『哲学の貧困』での資本家社会の把握、すなわち、それの表面的な「偽りの衣」もしての平等性、内部における階級性＝不平等性を、彼の経済学体系化の方法のうちに受けとめ、『哲学の貧困』でのみずからの問により明白に答えようとしたものだと考えられるのである。

もっとも、『賃労働と資本』におけるマルクスの経済学上の理解は、全体としては、古典派経済学、とりわけ、リカードの経済学における概念規定を根本的に越えたものとすることはできないと思われる。[4] というのは、労賃の規定に示されているように、彼が「商品一般の価格を規制する一般的法則」という場合、それは労働時間としての商品相互の等労働量交換を意味し、したがって、リカード的な商品の相対価値を規定する法則というものを根本的に克服しえたものではないと思われるからである。また、労働力商品の価値規定自身も、リカードのそれである、と言いえよう。

確かに、資本・賃労働関係を右のような二側面に分離して把握することによって、「労賃は、労働者によって生産された商品における労働者の分け前ではない。労賃は、資本家がそれによって一定量の生産的労働を買い取るべき、既存の商品の一部分である」(a. a. O., S. 400) とすることを可能にしている。つまり、この理解自体で言えば、労働賃銀を、利潤、地代とともに、価値の一分配部分としたリカード的把握を越えている。またそれに応じて、資本を「一つの社会的生産関係」とするマルクスの理解は、「生きている労働が蓄積された労働に対し、その交換価値を維持し増加する手段として役立つ」(a. a. O., S. 409) という彼の独自的な資本関係の把握を可能にしたとも言いうる。とはいえ、もちろんここでは、マルクスはその資本の規定においても、価値増殖をなす運動体として取り出しているわけではない。むしろ、そういう規定自体は、彼がここで資本・賃労働関係を二つの側面に分離したこ

とによって取り出した「交換関係」の側面を、「流通」それ自体における諸規定として解明しようとした『グルンドリッセ』以降において究明されることになるのである。

また、それに対応する労働と労働力との区別の問題も、ここではかならずしも十分に把握されているとは言いえない。マルクスは、ここでは、資本を「維持し増殖する」根拠となる労働者の労働を、「生産的活動」「創造的力」というようにとらえている。これは、彼が「……労働は、その所有者たる賃労働者が資本に売る一商品である」としながら、「だが、労働は、労働者自身の生命活動であり、彼自身の生命の発現である」(a. a. O., S. 400) と述べていることに対応しているものである。この労働把握は、明らかに、商品として売買される労働力を、人間の合目的的活動、あるいはそういう意味での人間の生命活動自体として理解している傾向の強いものである。それはまた、彼が「それだから、彼の生命の活動は、彼にとっては、生存しうるための一手段にすぎない」、したがって、「むしろ労働は彼の生活の犠牲である」としながら、このように言っていることからも示されている。

「それゆえまた、彼の活動の生産物は、彼の活動の目的物ではない。彼が自分自身のために生産するものは、彼が織る絹でもなく……彼が建築する宮殿でもない。彼が自分自身のために生産するものは、労賃である」(*ibid.*) と。

要するに、マルクスは、労働者の労働というその生命活動が目的にしてなすことになるもの、というかたちで、人間の合目的的活動が、資本家社会のもとでは賃銀を目的とする賃労働に変わるとしているのである。したがって、のちのマルクスの労働把握に対比すれば、それはいまだ労働の具体的側面に着目している傾向にあるものだと言いえよう。

しかし、他面では『賃労働と資本』において、マルクスは右のような労働把握を越えてゆく考察を行なっていることも事実である。それは、彼が生産に充用される資本を「生産的資本」と名づけ、それの増大と労賃との関係を

明らかにしている箇所において示されている。この『賃労働と資本』での後半のマルクスの考察は、それ自身は、資本の蓄積と人口法則の問題を、資本の有機的構成の高度化と相対的過剰人口のかたちで論じており、彼の、古典派のそれを越える独自な人口法則論の萌芽を示しているものである。そこでの彼の論理構成は、生産資本の増大(資本の蓄積)が、商品の「市場価格」と個別的「生産費」の差、つまり特別利潤を獲得する資本相互の競争を通じて、各資本の「分業の増進」、「新機械の使用および改良」、「自然力のいっそう有利で大量的利用」(a. a. O., S. 417)といういわば資本の有機的構成の高度化を伴なう蓄積となる、というようになっている。したがってこの蓄積過程は、「商品の価格を生産費までに引き下げる」「生産費の法則」として絶えず資本家を強制する。しかし資本を強制するこの過程はまた同時に労働者間の競争の拡大をも強制する。すなわち、「より大規模な分業は一人の労働者に、五人、一〇人、二〇人の労働能力を与える。したがってそれは、労働者たちのもとでの競争を、五倍、一〇倍、二〇倍に増やす」、「機械は、同じ影響をはるかに大規模に引き起こす。というのは、それは、熟練労働者を不熟練労働者によって、男子を女子によって、大人を子供によって、駆逐するからである。」(以上、a, a, O., S. 419—420.)

確かに、この考察は、古典派が解明することのできなかったマルクスの独自な蓄積論の出発点をなしているのであるが、しかしそれはまた、初期の考察としてはとうぜんであるが、「生産費の法則」としての資本の競争の絶えざる過程に対し、労働者間の同じ競争が直接対応させられているにすぎない。したがって、彼は右のような展開のなかで、次のような労働者間の競争の内容を与えているのである。

「分業が進むのと同じ程度で、労働が単純化される。労働者の特殊な熟練は無価値となる。彼は、肉体的活力も精神的活力も働らかせる必要のない簡単で単調な生産力に転化される。彼の労働はだれにでもできる労働になる。……労働が単純となり習得しやすくなればなるほど、それを自分のものにするのに必要とする生産費が少なくなれ

ばなるほど、労賃はますます下落するのである。なぜならば他のあらゆる商品の価格と同様に、労賃も生産費によって決定されるからである。」(a, a, O., S. 420.)

みられるように、ここではマルクスは、商品の価値規定と労働力商品の価値規定とをほぼ同じ性格のものとして理解しており、一方で労働の単純化の傾向を指摘しながら、他方で、労賃の「生産費」というかたちで、労働という独自の商品に、一般商品と同じくそれの形成に生産費が必要とされるように理解している。おそらく、マルクス自身は、以上の過程を通じて、労賃が「生存と繁殖費の最低限」に帰着するのだと考えていたのであろう。しかし、マルクスの言う「生産的資本」(これは、彼ののちの表現では産業資本とされたものに相当すると言えよう)が「社会的生産関係」として歴史的に独自な生産関係を形成するのは、まさに、労働者の特殊な熟練を機械に置き換え、そうすることによって、労働を単純労働化することに、したがって、労働者の労働がたんなる労働一般となることにある。マルクスは、ここでは、現実の過程で行なわれている、いわゆる資本の分解傾向と、その傾向を通じて形成される経済学の理論化の根拠とを、そのままに把握しているのである。(6)

とはいえ、彼はこのような考察によって、古典派、とくにリカードが経済学の体系化に横たわる問題として取り上げながら未解決のままにした「労働の質」の問題を、解決しうるところにまで達しているのである。つまり、マルクスの言う生産的資本に相対する労働者の労働は、彼自身の合目的的な「生命の活動」「生命の発現」という労働行為としてではなく、むしろそういう性格を消極化した、単純な労働一般として資本との売買関係に入るということである。資本は、そういう同質的な人間労働一般を商品の生産の、つまり自己の生産過程の基礎とし、それによってあらゆる商品の売買関係を量的な価値を基準とする統一的な関係として展開することになるわけである。マルクスは、資本が生みだすそうした傾向を感知し、それなりの考察をなしているのであるが、ここではそれを理論

体系の基礎に据えるまで十分にとらえきってはいないと思われる。したがって、『賃労働と資本』において労働と労働力の区別が、明確化されたものとはかならずしも言いきれないであろう。

資本・賃労働関係を「交換関係」と「生産」との二側面に分離して把握するというマルクスの考察方法は、『哲学の貧困』においてリカード経済学の評価と自己の唯物史観との関連から生じた問題を批判的に彼の経済学の理論的体系化のうちに積極化しはじめたものと言いうるであろう。そしてそれは、ひとまず、スミス、リカードの価値論の限界、前者の労働・生産過程の交換過程的把握、後者の価値分配論的把握、を越えようとする性格のものとして示されている。しかし、そうとはいえ、『賃労働と資本』では、いまだ萌芽的な大ざっぱな枠組みがなされているにすぎず、前述の二側面が、価値法則論を基礎にした統一的な原理的展開として体系化されているわけではない。

マルクスは、むしろ、『グルンドリッセ』以降において、それをすでにみた古典派経済学への限界設定と積極的に結びつけ、同時に彼自身の原理的体系化のうちに明確化させていくのである。そこで次に『グルンドリッセ』におけるマルクスの理論的展開について検討してみよう。(7)

(1) 『哲学の貧困』については、なお次のことを指摘しておきたい。われわれがここで『哲学の貧困』を取り上げ、それをマルクスの「経済学批判」の視角の成立において一つの地位を占めているとしたのは、彼が「リカードの価値論は現在の経済生活の科学的解説であり、ブルードン君の価値論はリカード理論のユートピア的解釈である」としていることによってである。いわゆる初期マルクスと言われる時期では、マルクスはすでにしばしば指摘されているように、『経済学ノート』の「ジェームズ・ミルに関するノート」で商品の価値を認めながら、それが貨幣＝交換価値として現われ、等価物の交換関係を展開するという理解を示している。それと『経済学・哲学草稿』での「有産者・無産者」、「搾取者と被搾取者」というかたちでの資本・賃労働関係の把握とを見れば、マルクスは、すでにかなり早い時期から、先に言及した、表面上の平等、実質での不平等との対比による資本家社会考察の視点をもっていたわけである。しかし、その場合に、彼は資本家社会の解明に対して古典派

経済学の原理的体系が有する性格を積極的に自己の視野のうちに入れていたわけではなかった。その点は、たとえば『一八四四年の『経済学・哲学手稿』では周知のように次のようなことになっていたのである。

「国民経済学は私有財産という事実から出発する。国民経済学はわれわれにこの事実を解明してはいない。国民経済学は、私有財産が現実のなかでたどってゆく物質的過程を、一般的で抽象的な諸公式でとらえているが、その場合、これらの公式は国民経済学にとって法則として通用するのである。国民経済学はこれらの法則を概念的に把握しない。」

「国民経済学は、労働者（労働）と生産とのあいだの直接的関係を考察しないことによって、労働の本質における疎外を隠蔽している。」（Marx-Engels Werke, Erganzungsband, erster Teil, S. 510 und 513. 城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』、岩波文庫、八四および九〇ページ。）

あるいは、「ジェームズ・ミルに関するノート」でもこのように言われている。

「明らかなのは国民経済学が、この〔等価物、価値からの貨幣への〕発展全体をたんなる一箇の事実として、つまり偶然的な必要の所産としてしか理解できない、ということである。

……国民経済学者にとっては、生産と消費、また両者の媒介者としての交換や分配がばらばらになっている。」（Erganzungsband, a, a, O., S. 455—456. 杉原四郎・重田晃一訳『マルクス・経済学ノート』、未来社、一九六二年、一〇五—一〇六ページ。）

マルクスは、双方において結局彼のいわゆる疎外論を軸とした対象——資本家社会——認識によって、「国民経済学」を批判している。しかし、その場合に、彼の対象自体は、経済学的解明を、しかもそれが有する特有な性格において原理的体系的解明をもって客観的な科学的認識を可能にするものである。したがって、マルクス自身も、彼の批判の対象となった「国民経済学」から、資本家社会の諸経済現象の理解を借りざるをえなかったのであって、それはたとえば、「われわれは国民経済学の諸前提から出発した。われわれは国民経済学の諸用語や諸法則を受けいれてきた」（Erganzungsband, a, a, O., S. 510. 同前訳、八四ページ）ということとともに彼の著作のうちに示されていることである。

しかも、そのような彼の「国民経済学」に対する批判的視点は、先に指摘した対象の有する性格からして、むしろそれを考察してきていた、A・スミス、D・リカードの経済学におけるそれの原理的性格の評価と、その限界の克服というかたちで、それ自体を積極的に問題とする視角に転化せざるをえなかったものである。そういう意味で、同じ古典派経済学の批判としても、彼の対象認識にかかわるそれの地位からすれば、いわゆる初期マルクスと『哲学の貧困』以降とでは、かなり相違がある

ものと考えられる。したがって、とくに「ジェームズ・ミルに関するノート」以降を、労働価値論によるマルクスの経済学理論の発展として評価する、周知のローゼンベルクの『初期マルクスの経済学説の形成』における考察は、結局、マルクスの「経済学批判」の意義を低くみることになるものと思われる。

（2）マルクスは、『賃労働と資本』で、商品の「価格」が労働時間によって規定される、とする場合、その労働価値論自身をいまだ積極的に論証するというところには達していない。つまり、彼はここで市場価格の変動が落ちつく自然価格、または「平均価格」を「生産費」というかたちでとらえ、それが労働時間によって規定された商品の価格になる、というように理解している。それゆえ、自然価格－価値というリカード的傾向の強い面を残していると言えよう。

（3）労働と労働力の区別の問題は後述の通りである。剰余価値に関しては、マルクスは事実上この『賃労働と資本』において、資本の価値増殖の根拠を労働者の労働の「生産的活動」「創造力」に置くことによって把握していると言いうる。またそのために、資本と賃労働との生産を基礎とする根本的な対立関係を説きえたわけである。

しかし、ここではマルクスは、労働価値論によりつつ賃銀と利潤との対抗関係を論じたリカードを、賃銀は分配範疇ではないという把握によって包括的な意味では克服しているのであるが、生産過程の解明をとうして、資本のそれを価値形成・増殖過程として明らかにする彼の独自的観点を積極的に論じたわけではないのである。したがって、剰余価値自体については、いまだリカード的なものに負っていたと思われる。

（4）先述のように、『賃労働と資本』では、マルクスは労働価値論なり、あるいは価値法則論なりを体系的に論証するということをしていないし、またそのような地点にまで達しえていないのであって、むしろ個々の経済学上の概念は、古典派の、とくにリカードのそれによっている。ここでは、彼の体系成立を左右した全体的視角とは別に、そういう意味で指摘したのである。

それゆえ、ローゼンベルグが、『賃労働と資本』でマルクスに課せられた問題は、「なによりもまず、リカードの価値論そのものに批判をくわえること」（副島種典訳『初期マルクスの経済学説の形成』、大月書店、一九五七年、三二一ページ）であったと――エンゲルスを援用しつつ――論じているのは正しいものと言えよう。

（5）なおここでは訳文を、事柄の性質上、Werke 版によって示し、インスティテュート版、一八九一年のエンゲルスによって補正された版によって参照し補足することはしなかった。

(6)　のちに改めて指摘することであるが、マルクスは一八五〇年代後半のいわゆる「経済学批判体系のプラン」において「資本一般」を論ずる範囲にあっては、賃銀の変動を捨象し、その変動は「賃労働」を論ずる箇所で別に考察するものとなっている。(Cf. Werke, Bd. 29, S. 312 ff.)このマルクスの労働力商品の価値規定に関する考察方法自身重要な論点を含むものであり、それにここでの「生存と繁殖費の最低限」にある労賃の規定が関連をもっていると考えられる。

とはいえ、ここでマルクスが考察している熟練労働の単純労働化という労働一般の概念の抽出とそれを前提とする労働力商品の価値規定との関係は、理論的には、前者による労働一般の概念の明確化によってはじめて後者の規定も積極的に論じうることになるというものである以上、この彼の論点はそれなりに評価しうるものである。

(7)　なお、『賃労働と資本』に関連して、手稿『賃銀』について若干ふれておきたい。これは、一八四七年一二月後半にマルクスが、ブリュッセルのドイツ人労働者協会で行なった講義（すなわち『賃労働と資本』）の最後の一回分あるいは数回分の下書きだと推測されているもの（『全集』編集者による注解）である。

事実、マルクスは、そこで主に「生産的資本」の増大と賃銀との関係を論じようとしている。(『全集』編集者によって〔A〕〔B〕、〔C〕と三部分に分けられたうち、とくに〔C〕以降〔Werke, Bd. 6, S. 540 ff.〕の部分である。)そこでは、本文で指摘した労働の単純化、労働者間の競争の問題が機械、分業との関連で取り上げられ、しかも、とくに「マルサス理論」が明確に批判の対象とされ、それを克服する彼の相対的過剰人口論の萌芽が示されている。したがって、文献史的に言えば、手稿『賃銀』は、『賃労働と資本』に対して基礎的な地位を占めているものである。なお、この点に関しては、前出、時永淑『経済学史』、三九一ページを参照されたい。

3　『グルンドリッセ』における資本・賃労働関係の把握(一)

『賃労働と資本』において、萌芽的に示された資本家的商品経済の「交換関係」と「生産」との二側面からの把握という方法は、『グルンドリッセ』での彼の論理展開のうちに定着しているとみることができる。すなわち、彼

はそこでこのような指摘をなしている。

「資本と労働との交換を考察すれば、それが形式的にばかりではなく質的にも異なり、そしてそれ自体対立した次の二つの過程にわけられていることがわかる。

(1)、労働者は、彼の商品、労働、つまり他のすべての商品と同じように、商品としてやはり一つの価格をもっている使用価値を、資本が彼に譲渡する一定額の交換価値、一定額の貨幣と交換する。

(2)、資本家は、労働自体、すなわち価値を定立する活動としての、生産的労働としての労働を交換で手にいれる。すなわち彼は、資本を維持し倍加させ、そしてそれとともに資本の生産力、資本を再生産する力、資本自体に属する力となるところの、生産力を交換で手にいれる。」(*Grundrisse*, S. 185.)

みられるように、ここでは、資本・賃労働関係に基づく資本家的生産の解明が、その関係の「二つの過程」の分離によって行なわれるものとして明確に指摘されている。そしてまた、その方法が彼において明白にされてきたことにおいて、当初に取り上げたA・スミス、D・リカードらの経済学に対する彼の限界設定の視角も積極的に表わされることになったと言いえよう。ところで、マルクスのこの「二つの過程」の分離の方法は、スミス、リカードの価値論について、それぞれ次のような限界の克服をなしうるものであった。

すなわち、A・スミスに関しては、賃銀による商品の価値規定と投下労働量による商品の価値規定との混同である。これは、マルクスが、スミスの周知の「労働こそは本源的な購買貨幣であった」とする彼の労働価値論の性格を、労働・生産過程の交換過程的把握、したがって資本・賃労働関係に基づく資本家的生産を交換関係に解消する性格を有す把握、とほぼ見抜いたからにほかならない。つまり、スミスによると、「労働は本来、自分自身の生産物を賃銀として受け取り、賃銀イコール生産物」となり、賃労働として資本のもとで特種な生産過程を遂行する労

働者の労働の性格が単なる労働と生産物との商品交換関係におけるものとされてしまうのである。

また、リカードについても、「分配を規定する法則の決定」という彼の経済学の性格が、「ただもっぱら労働と土地の一般的生産物の三階級のあいだへの分配が語られているにすぎない」(a, a, O., S. 236—237.)のであって、それゆえ、「またもや、賃労働と資本は自然的なものとしてとらえられ、使用価値としての富の生産のための一定の歴史的な社会形態としてはとらえられていない」(a, a, O., S. 236)とされるのである。ここでマルクスは、リカードが、資本家・賃労働者・土地所有者という資本家社会における基本的な階級関係を形成するものが相互に自由な商品売買関係において同等な地位にあるという形態を示すということと、それらが「生産」において占める地位とを同一視している点を明確にとらえている。したがってまた、リカードにあっては「つまりその形態〔先に引用した『社会形態』〕そのものは、自然的なものであるというまさにその理由で、どうでもよいものであり、……したがってブルジョア的富の特定の性格は理解されていない」(*ibid*)という指摘も可能となっているのである。

それゆえ、スミス、リカードの価値論は、結局、彼らがそのような対象把握に陥ってしまった資本家的商品経済のもとでは、ブルジョア的富の受け取る同質的形態あるいは関係と、それを通じて成立する資本・賃労働関係による特種な生産過程の形成とを明らかにしうるものではなかった、ということである。したがって、前述の「二つの過程」の分離は、スミスの労働・生産過程の交換過程化による把握、リカードの価値論の分配論的性格を克服し、そうすることによって、古典派経済学に代わる資本家的商品経済の統一的把握を科学的になすマルクス自身の経済学の体系構成として積極的に展開されねばならない性格のものでもあったわけである。

そこで、『グルンドリッセ』において、マルクス自身は右のような観点を、どの程度まで、資本家的商品経済の統一的把握のための体系的な論理展開へと積極的に転化せしめえたかが問題となる。この点を考察するために、ま

ず、彼が「二つの過程」に分離した資本・賃労働関係の両側面について、その性格、内容をいま少しみておこう。

マルクスは、先の引用文における第一の過程すなわち「普通の流通」に属する資本と労働との関係について、このように指摘する。

「労働者の資本家との交換は単純な交換であって、どちらも等価物を受け取る。すなわち、一方は貨幣を受け取り、他方は商品を受け取る。この商品の価格は、それに対して支払われた貨幣と正確に相等しい。」(*a, a, O.*, S. 192—193. 傍点引用者。)

すなわち、マルクスが「普通の流通」に属するとした商品としての労働の売買関係は、まったく「単純な交換」関係におけるものであって、しかもそれは、「どちらも等価物を受け取る」という単なるW—G—Wの商品流通に属するものなのである。もっとも、この彼の理解は、『グルンドリッセ』で、「生産」と分離した「単純な交換」関係自体を考察した別のところで示されているものとまったく一致しているものである。それを示しておけば次の通りである。

「すなわち、単純に把握された貨幣関係においては、ブルジョア社会のあらゆる内在的対立は消失しているようにみえ、……商品または労働が単なる交換価値として規定され、いろいろな商品が相互に関連づけられるその関係が、これらの交換価値相互間の交換として、その等置として規定されるかぎり、そのあいだでこの過程が進められるところの個人または主体は、ただ単純に交換者としてだけ規定されているのである。形態規定においてみるかぎり、彼らのあいだには絶対的になんの相違も存在しない。……だから、交換の主体としては彼らの関係は平等の関係である。」(*a, a, O.*, S. 152—153.)

ようするに、「単純に把握された貨幣関係」は、同時に「交換価値相互間」の交換関係であって、そこでは、「商

品または労働」がそれぞれまったく同質的なものとして「等置」されているものと理解されているのである。それゆえ、マルクスは、ここでは第一の過程の内容、性格について、労働力商品の売買関係と一般商品のそれとしての流通とを区別する考えをまったくもっていなかったわけである。

ところで、右のようなマルクスの理解は、すでに労働価値論をもって経済学の理論的体系化を行なうという試みを進めていた彼の論理からすれば、そしてそれが先の意味での古典派批判として進められていたということからすれば、それ自身では奇妙な論理となっている。つまり、マルクスによると、「すべての商品（労働を含めて）の価値（実質上の交換価値）は、その商品の生産費によって、言い換えれば、その商品の生産のために必要とされる労働時間によって規定されている。価格は金で表現したこの商品の交換価値である。」（a, a, O, S. 55.）そうであるならば、「労働時間」によって価値を規定された労働が、また同時にその「労働時間」の根拠になるとされるわけである。したがって、右の『グルンドリッセ』「ノートI」の「貨幣の章」で考察されている「単純に把握された貨幣関係」の論理をもってすれば、資本・賃労働関係における第一の「過程」は、労働と労働の「生産物」との等置というスミス的な価値論のなかに陥ってしまっていると思われるのである。(1)

もっとも、マルクスは、単純な流通を主に考察している「ノートI」の部分では、その点をひとまず、次のような理解によって解決しようとしているのである。すなわち、「価値尺度としての労働時間は、ただ理念的に存在するだけだから、価格の比較のための材料としては役にたたない」。「つまり、一般的な対象としては、労働時間はただ象徴的にだけ存在しており、まさに、ふたたび特殊な一商品の形を取ることができるというのは、貨幣として定立される特殊な一商品だからこそである。労働時間は商品の自然的特殊性にはかかわりはない。それから区別された（引き離された）交換の一般的な対象としては存在してはいない。」（a, a, O, S. 58–59. und 85.）

それゆえ、マルクスは「単純な流通」での「労働」を含めた「いろいろな商品」の「等置」関係のなかで、労働時間が、まったく「象徴的」に、あるいは「理念的」にだけ存在しているにすぎないものとし、ただ使用価値的な「自然的特殊性」をそれ自身では他の諸商品のようには積極的なものとしていない「貨幣」においてだけ現わされるものとしているのである。こうすることによって、「労働時間」を前面におし出すことから生ずる論理矛盾、あるいはスミス的把握を回避し、結局は、「流通」を貨幣による「交換価値相互間の関係」にとどめようとしているのである。したがって、彼が、当初から交換価値を「対象化された労働または労働時間の量」としながらも、流通自体は「外からこの交換価値をとらえて、その内部でこれを変形させる運動」(a, a, O., S. 174) としたということは、いってみれば必然的なことであったと考えられるのである。もっとも、以上のようなマルクスの理論的処理が、古典派的な把握を克服しえているか、ということは当然別の問題である。[2] 前述したようにマルクス自身に即してみるならば、彼のこのような理論的処理はかならずしも十分なものと考えるわけにはいかないように思われる。というのは、たとえば、彼は次のような指摘をも行なっているからである。

「貨幣は、交換価値がそこに隠されて、その一般的規定に適応する姿態を受け取る物的な媒介物である。アダム・スミスはこう言っている、すなわち労働（労働時間）はすべての商品が購買される本源的な貨幣である、と。生産行為を考察すれば、このことは依然としてつねに正しい。」(a, a, O., S. 84.)

マルクスは、これまで（そしてのちの『剰余価値学説史』においても）、スミスの労働＝本源的購買貨幣という価値規定を、賃銀による商品の価値規定だとしてきている。それをここでは、生産の内部における投下労働量による商品の価値規定のように指摘し、そうすることによって、「いろいろな商品」の交換関係における労働時間の「象徴的」「理念的」存在と対応させているのである。したがって、端的に言えば、マルクスは、本来であるならば、

彼の批判の対象であるはずのものを救済し、そしてそれによって自己の論理を一貫させようとしているのである。しかし、この点は、ただ単純な流通における彼の理論的把握にだけかかわる問題ではない。それは当然のことであるが、彼が二つの過程に分離した資本・賃労働関係を、どういうかたちで統一しているのかという価値法則論自体の問題である。そこで、次に第二の過程に対するマルクスの考察を明らかにし、右の点にかかわる彼の価値法則論の構造の検討へと進もう。

第二の過程について、マルクスは次のように言っている。すなわち、「貨幣と交換に入手したものの使用価値が特殊な経済関係として現われる」(g. a. O., S. 185) 過程である、と。そしてこの過程は、「資本が、それとの交換によって、自己の価値規定を喪失しないような対象としての《商品》」を入手する過程のことなのであり、そして結局、この場合の「商品」を意味するものが、「関係の側面として定立された使用価値」(g. a. O., S. 178—181) としての性格にある「労働」なのである。ここでマルクスが第二の過程について、とくに、「関係の……使用価値」というかたちでの労働を指摘するのは、それなりの根拠があるわけであるが、それのもつ意味は後述する通りなのであって、その点を取りあげる前に、引き続きマルクスの指摘を見ておこう。

「使用価値としての労働は、資本にとってだけのものであり、資本それ自体の唯一の使用価値、すなわち資本がそれによって価値増殖する媒介的活動である。自己の価値を再生産し増加させるものとしての資本は、過程としての、価値増殖の過程としての自立的交換価値（貨幣）である。だから労働は、使用価値としては労働者のものではない。だから労働は富の生産力としては、すなわち致富の手段または活動としては、彼にとってのものではない。彼はそれを使用価値として資本との交換にもちこむが、その場合資本は、資本としてではなく、貨幣として彼に相対する。それがはじめて資本としての資本となるのは、はじめはこの交換の外部にあって、この交換から独立して

いる労働の消費を通じて、労働者に関係することによってである。」(3)(*a, a, O.*, S. 213.)

マルクスは、この第二の過程を、資本の価値増殖過程、だから同時に労働者による剰余労働の遂行過程として特徴づけている。これは、明らかに、『賃労働と資本』においてそれなりに示された資本と労働との「生産」に基づくところの対立関係について、資本が自己の生産過程に対して外部に前提し、等価交換によって関係した賃労働を基礎にする剰余価値の生産過程にほかならないのだというかたちで、理論的に一貫させようとしたものと見ることができる。そしてこの解明は、確かに、リカードにおいて事実上取り出された剰余価値を、彼がそれを分配範疇として把握したために考察することができなかったその形成過程で、したがって資本の生産過程(価値増殖過程)で、究明するということを可能にしたものである。それゆえ、このマルクスの第二の過程は、右のような意味において、生産過程を経済学の理論体系のなかで固有に考察するということの意義をはじめて明確化したものとみることができる。

ところで、右のように、経済学の理論体系のうちに、資本の生産過程分析を据えることに成功したマルクスの理論的把握は、あくまでも、第一の過程に対する第二の過程の関連においてであった。そしてその点に、先の「関係の側面として定立された使用価値」という理解も与えられているわけである。それは、マルクスが、「価値を定立する活動としての、生産的労働としての労働を交換で手に入れる」過程、または「貨幣と交換に入手したものの使用価値が特殊な経済的関係として現われる」過程、というように言い表わしたものにほかならない。しかしそれは同時に、第一の過程における経済的関係に対比された、あるいはそれとの関連において取り出されたものにほかならないのであって、それゆえに彼は第一の過程との関係で第二の過程を次のように性格づけてもいるのである。

「資本と労働との交換——その結果が労働の価格である——は、労働者の側からは単純な交換であろうとも、資

本家の側からは非交換（Nicht-Austausch）でなければならない。彼は与えたものよりも大きな価値を受け取らなければならない。資本の側からみるとき、この交換はただ外見的だけのものでなければならない。言い換えれば、交換の形態規定とは別の経済的形態規定に属するものでなければならない。そうでなければ、資本としての資本とそれに対立する労働としての労働はありえないことになろう。」（a, a, O., S. 228.）

みられるように、マルクスは第一の過程を、「交換の形態規定」と言い、それに対して第二の過程を、「非交換」である「別の経済的形態規定」であると指摘している。[4] 彼がこの場合に、「労働者の側」「資本家の側」という、若干便宜的説明をなしている点はともかくとして、「交換関係」と「生産」は明らかに異なる経済的過程である。したがって、資本・賃労働関係という資本家的商品経済の基軸的関係を解明するものとしては、「交換」「非交換」の対比だけでは問題は処理されえない。そこでマルクスは次のような展開からその関係について若干詳しく明らかにしようとしている。すなわち、「剰余価値とは、一般に等価を越える価値のことである。等価とは、その定義からすれば、価値のそれ自身との同一性にほかならない。だから等価からは剰余価値はけっしてでてくることはできないし、したがってまた、本来的に流通過程からでてくることはできない。剰余価値は、資本の生産過程自体から生ずるものでなければならない」（a, a, O., S. 230）と。端的に言えば、マルクスは、すでにみた資本・賃労働関係の第一の過程における等価交換――これは貨幣を「象徴的」「理念的」な労働時間の表現物とした等労働量交換――を、「価値それ自身の同一性」の関係とし、それに対する第二の過程は、その「同一性」＝「等価」を越える価値の増殖過程における関係にあるものとしている。しかし、いずれにしろ、このマルクスの第二の過程の把握、あるいは規定はかならずしも明晰なものではない。

マルクスの論理からすれば、先の「関係の……使用価値」という労働者の販売する商品の使用価値は、右の価値

増殖過程（資本の生産過程）に対する関係としてとらえられ、したがって、いわば商品の有する二側面（価値と使用価値）からする対比として、あるいはそうしたことによる使用価値範疇の定立として処理されているというようにも考えられる。[5] だが、彼自身がすでに指摘しているように、剰余価値は資本の生産過程での労働者の剰余労働によっているとしても、その剰余価値自身が「価値」として「等価」を越えた価値分をなしているわけである。それゆえ、「等価」からは剰余価値は生じないということによって、両者の価値の側面での「同一性」自身を否定することはできない。この点は、剰余労働をもなす労働者の労働自身が、とうぜん資本の生産過程では、商品を生産する労働として、新たな商品の生産そのものに入りこんでおり、したがってその商品の価値を形成する労働をなしている、ということからも明らかなのである。

もっとも、このような問題は、マルクスの議論では、資本の生産過程で新たに生産された商品の価値のうち、剰余価値部分以外の部分は、すでに、第一の過程における交換関係、すなわち資本が生産過程を遂行するために要するものを購買する関係において確定されているのだ、ということになるのであろう。つまり、それは、等労働量交換としての商品流通において規定された部分をなすにすぎないということになるのであろう。しかし、このようなマルクスの論理における一貫性も、言ってみれば、労働力商品の価値を、交換関係自体において規定しうる、という限りで可能なものである。言いかえればマルクスは、労働力商品の価値を、あらかじめある一定の価値としてとらえている限りで、彼の理論を構築しえているということになる。だが、人間の労働を人間の労働による商品としての生産物とするわけにはいかないのであるから、「等価」交換としての、すなわち労働量＝労働時間の「等置」としての商品交換関係における価値規定を与えるということは、それ自身では不可能である。すでに言及したように、彼は第一の過程としての商品交換関係において、投下労働量による商品の価値規定をあらかじめ前提して説い

ていた。その点の当否はともかくとして、資本・賃労働関係を二つの側面（過程）に分離し、そこから古典派経済学の限界を克服しようとする彼の方法が論理的な一貫性をもった体系として展開されうるためには、右の点が――つまり、労働力商品の価値規定が――、価値の内実に即するかたちで与えられなければならない。その意味では、この点が『グルンドリッセ』における彼の理論構成の軸になっているとみなすことができる。そこで、これを考察することによって、資本・賃労働関係の二側面（二つの過程）を統一している基礎としての彼の価値法則論の内容をやや詳しく検討してみなくてはならない。そうすることによって同時に、マルクス自身が、スミス的な、あるいはリカード的な価値論をどこまで克服しえているかが明白になると考えられるのである。

（1）『グルンドリッセ』「ノートI・貨幣の章」におけるマルクスの理論的考察は、周知のように、プルードン主義者ダリモン批判を媒介にして、彼の貨幣論が形成され、結局、流通手段、価値尺度としての貨幣、およびいわゆる貨幣としての貨幣の解明へと進んでいるものである。この部分については、最近、いわゆるマルクスの「市民社会」把握に関する基軸的認識の形成におけるものとして多大の注目を集めている。その代表的なものが、「世界史の三段階把握」論による平田清明教授の主張である。教授の主張は、端的に言えば、すでにこれまでにしばしば議論された単純商品生産社会の想定を生ぜしめる商品論（いわゆる価値論）の論証方法の当否の問題を、「単純商品生産社会」＝「市民社会」の形で再生させたにすぎないものである。ここでは、論文の性格上、平田教授の主張の内容を直接検討するわけにはいかないが、関係ある箇所では若干の指摘を行なっておく。なお、右のような平田教授によって代表される議論が、とくに、『グルンドリッセ』に基づいて行なわれているという点は、簡単に言えば「市民社会」認識がほかならぬ貨幣把握なのであり、また貨幣把握が、マルクスにおいて、もっとも積極的に取り上げられはじめているのが『グルンドリッセ』だ、ということである。確かに、ここでは、マルクスはいまだ商品論を貨幣論に先行させうるところにまで流通形態を抽象しえていない。そこに「ノートI・貨幣の章」の特徴があると言える。しかし、平田教授の議論は、その特徴によって展開されているようである。たとえば、教授の論理の性格を示す文章として、次のようなものがある。

「市民社会の労働はつまり私的労働は貨幣を必然たらしめるのであり、また逆に、貨幣の必然自体がこの労働の特殊社会的形態を表明しているのでもある。」

「価値論。貨幣論として成就すべき価値論、つまり価値形態論。この、労働の所産たる商品に固有な価値形態という特殊な社会的形態規定についての、理論的探求こそが、かの世界史の三段階＝三形態の把握にほかならない」（『思想』、一九七〇年、第七号、『思想』、一九七〇年、第七号所収、二一ページ）。

このように教授が、『グルンドリッセ』の貨幣論によりながら、私的労働—貨幣の関係に、価値形態、社会的形態規定、世界史の三段階把握、という壮大な構図を描くことが可能となっているところに、まさに、「ノートI」におけるマルクスの論理の抽象性の不十分さがあると言わなければならない。

『グルンドリッセ』に基づいて、平田教授が独自的な議論を展開したマルクスの論理における根本的性格は後述の通りである。

（2）『グルンドリッセ』、「貨幣の章」のマルクスの貨幣把握、あるいは、総じて「交換価値相互間」の関係たる流通把握を、ただたんに本文において指摘した性格のものとしてしまうわけにはいかない。それは、『グルンドリッセ』自体が、全体として彼の「経済学批判」の視角からする理論の体系化のための研究を基調とした「草稿」的性格のものである以上、彼においていまだ未成熟な種々の見解が交錯しているのが当然だからである。だが、ここで一定の性格規定を与えうるのは、あくまでも、彼の経済学の体系化の根拠をなしている資本・賃労働関係の把握に即した理論的一貫性としてであって、そうすることによってはじめて、「貨幣の章」におけるマルクスの論理の性格もそれなりに明らかになるということからである。したがって、『グルンドリッセ』のその「章」を、直接、のちの『資本論』における流通形態論と対比し、その意義なり限界なりを考察することは、それ自体無意味ではないが、かならずしも、その理論的基礎を明らかにしうるものではない。多かれ少なかれ、部分的な考察にならざるをえないことになる。それは、その貨幣の「章」が、『資本論』なり原理論体系なりのそれに該当する論理に、どれまで接近しえているか、あるいはどの程度まで古典派的なものにとどまっているか、というかたちで論じられることになり、それを支えているマルクスの基本的論理構造を見失ないがちになるからである。この点は、本稿の課題について言及したところで、それなりに明らかにした通りである。

（3）引用文中の「資本としての資本」という表現は、産業資本に対するものとして使われている。『グルンドリッセ』で

は、マルクスは、貨幣形態から直接「生産」を包摂する資本＝産業資本の分析に移行しており、流通形態としての資本の形式、すなわち、商人資本・金貸資本を抽象し、それを論理のうちに位置づけて説くことは、いまだなしえていない。

ただ、それを萌芽的に示すものとして、たとえば、「資本が直接的な交換価値および貨幣と区別されて定立されている唯一の規定性は、流通において、また流通を通じて、みずからを維持し、永久化する交換価値だという規定性である」(*Grundrisse*, S. 173) という指摘もみられる。しかし、その考察も実質上は、「商人財産と高利貸財産」(*a, a, O.*, S. 404.) として行なわれており、結局、それ自身としては非常にすぐれた解明であるが、いわゆる資本の本源的蓄積過程とともに把握されているにとどまる。それは、右のような商人、高利貸資本としての「貨幣自身は、それが歴史のうえで一役受けもつについては、それ自身が極度に強引な分離手段として歴史的過程にくいこみ、そしてはぎ取られて無一文となった自由な労働者の生成に協力する限りでだけ、そのような働きをするにすぎない」(*a, a, O.*, S. 406) としていることからも明らかである。

(4)　周知のように、『グルンドリッセ』での、単純な流通からの資本の生産過程への移行論には、いわゆる「取得法則の転回論」が関係している。それは、「自己の労働に基づく生産物の取得」と「資本による等価物をともなわない他人の労働の取得」との関連で説かれているものである。マルクスがここでこの「転回」論によりながら流通から生産への移行を説いているということは、直接には、先の注で言及したように、その関係を媒介する資本の流通形態をいまだ取り出しえていない、ということにある。しかし、その根本は、資本・賃労働関係の二側面への分離と、その二側面が統一される根拠となる価値法則論とに対するマルクスの理論的処理にかかわるものである。その点は、次項において考察しているので、そこで改めて言及したい。

(5)　もっとも、マルクスはかならずしも、『グルンドリッセ』において、積極的に商品を、しかもその二側面を取りだしているわけではない。むしろ、彼は、前述のように商品自体を理論的分析のうちに設定してはいないと言いうる。それは、たとえば次のような指摘からも明らかである。

「……生産物が商品になる、すなわち、交換の単なる契機となる。商品は交換価値に転化される。商品を交換価値としての自分自身に等置するために、商品は交換価値そのものとしての商品を代表している章標と取りかえられる。ついで商品は、このように象徴となっている交換価値として、ふたたび他のいずれの商品とも一定の割合で交換される。」(*a, a, O.*, S. 62.)

つまり、マルクスは生産物から出発しながら、それが商品となるときには、すでに交換価値と「等置」される関係にあるよ

うに解している。したがって、商品自体は直接交換価値に解消されてしまう結果になっており、それがまた、商品流通を「交換価値相互間の関係」として説くことと相応しているわけである。

しかし、この商品、生産物という対応は、また同時に交換価値、使用価値という対応関係においても説かれることになっており、結局は、この時期の彼の商品の二側面のそれなりの理解になっていると思われる。その点は、次のような文章において示されている。

「このようにして、生産物が商品に、商品が交換価値になることにより、生産物ははじめて頭のなかで、二重の存在を受け取る。こうした観念上の二重化は、商品が現実の交換で二重に現われるまでに、つまり一方では自然的な生産物として、他方では交換価値として、現われるまでに達する。」(*ibid.*)

なお、このような把握が可能になることの基礎には、マルクスの労働把握の一定の進歩が結びついている。この点に関してはのちに改めてふれる通りである。

(以下、続)